

研究室を訪れた人々 1995-1996年度

1995-1996年度は、幸運が重なって、外国からの珍しいお客さんを何度か研究室に迎え、貴重なお話をうかがうことができた。いずれの場合も、通訳はつけずに、大学院生・学部生を中心としたこぢんまりとした集団でお客さんを囲み、単にかしこまって講義を聞くというのではなく、むしろ親密な質疑応答や談話の場を持つことによってゲストの人柄に直接触れることができた（そして、談話の場はしばしば、その後の楽しい宴の席へと発展していった）。ロシア文化に興味を持つ若き研究者諸君にとって、このような場は、普段の授業からでは得られないような貴重な刺激になるのではないかと思う。今後もこのような機会は是非積極的に活用するようにしたい。なお、講義・談話の録音テープはすべて研究室に保管しており、貸し出しもできるようになっている。（沼野記）

アレクサンドル・ソクーロフ (Александр Сокуров)氏 1995年4月14日

ソクーロフ氏は現代ロシアを代表するもっとも前衛的な映画監督の一人。同氏と親しい通訳の児島宏子さんのご厚意で、滞日中の時間を割いて研究室に来ていただくことができた。ソクーロフ氏は文学やそれ以外の芸術・文化にも造詣が深く、ロシア文学を専攻する学生たちのために、特に映画と文学の関わりに力点を置いて話してくださった。この日の講義および質疑応答は、そのほぼ全容が『ユリイカ』誌（青土社）の臨時増刊・ソクーロフ特集号（1996）に北川和美訳で収録されている。

ソフィア・グバイドゥーリナ (Софья Губайдулина)氏 1995年6月2日

グバイドゥーリナさんは、旧ソ連出身で、現在ドイツ在住の作曲家。同氏の曲によるコンサートが日本で開催されるために来日していたところを、招聘元の（株）エン・ダの荒家正伸氏のご配慮により、研究室で講義していただくことが実現した。グバイドゥーリナ自作の音楽をCDで聞きながら、彼女自身の言葉に耳を傾けるという滅多にない体験をすることができた。特にゲンナジー・アイギの詩に作曲した作品についての解説が素晴らしく、感激。こちらとしては「こんなに世界的な有名な作曲家に、忙しいスケジュールの合間をぬって、音楽を専門としているわけではない大学の研究室に来てもらうなどというのも気がひける」という感じがあったのだが、音楽を始めとしたロシア文化全般についてロシア語でじっくり話し合う機会を持てたのは、グバイドゥーリナさんにとっても楽しいことだったらしく、妙に遠慮をせずにもっと積極的に出会いを求めたほうが良いと痛感した。なお、この日の談話については、斉藤毅によるエッセイ「未-来の響きに向けて——グバイドゥーリナとアイギ」（『ユリイカ』1995年11月号所載）を参照のこと。

アーノルド・マクミリン+スヴェトラナ・ガイセル=シュニットマン夫妻

(Arnold McMillin, Светлана Гайсер-Шнитман) 1996年4月19日

アーノルド・マクミリン氏はロンドン大学教授、現代ロシア文学（特に亡命文学）およびバラルーシ文学の専門家として著名。大阪大学の津久井定雄氏の世話で来日された。同

氏夫人のスヴェトラナ・ガイセル＝シュニットマン氏は、レニングラード出身の現代ロシア文学研究家で、ヴェネディクト・エロフェーエフ『モスクワ＝ペトウシュキ』に関する研究書がある。研究室ではマクミリン氏には現代ロシア亡命文学について（英語で）、またガイセル＝シュニットマン氏には女性の回想文学について（ロシア語で）話していただいた。

アレクサンドル・ゲニス (Александр Генис)氏 1996年9月24日

ゲニス氏はいまロシアでもっとも注目されている気鋭の文芸批評家の一人。1970年代にアメリカに亡命し、現在もニューヨーク郊外に在住。1996年9月に東大で行われた国際シンポジウム「ロシアはどこへ行く？」に招かれて来日したが、その後、現代ロシア文学についてスラヴ科の大学院生のために特別に講義をお願いした。ゲニス氏は聴講者一人一人の専門を聞き、その質問に答え、研究方向に示唆を与えるなど、非常にきめの細かい対応をしてくれた。こういう人を1年でも客員教授で呼べたらスラヴ科にとってどれほど大きなプラスになることだろうと（これはあくまでも個人的な感慨だが）つくづく思った。

グリゴリー・チハルチシヴィリ (Григорий Чхартишвили) 氏 1996年11月1日

チハルチシヴィリ氏はモスクワ在住の日本文学者・評論家。月刊文芸誌『外国文学』の編集次長の要職にもある。今回はエリカ・ヴォーロノヴァ夫人を伴っての来日。チハルチシヴィリ氏は三島由紀夫の優れたロシア語訳のほか、日本文学とロシア文学の関係をめぐる数々のエッセイで知られている。当然、日本語に堪能だが、研究室では、現代ロシア文学とロシアの文芸誌の状況について、学生たちのために特別にロシア語で話していただいた（講義の後、チハルチシヴィリ夫妻のための「日本文化」研究と称して、本郷界隈のカラオケを探索）。

アハロン・アッペルフェルド (Aharon Appelfeld) 氏 1996年11月25日

アッペルフェルド氏はヘブライ語で執筆するイスラエルの作家。ノーベル賞候補にも挙げられている国際的に著名な作家だが、日本ではこれまで紹介されず、1996年秋にみすず書房から『不死身のバートフス』『バーデンハイム1938』の2冊の邦訳が出版されたことを機会に初来日を果たした。みすず書房の栗山雅子氏およびイスラエル大使館文化担当のカルメラ・パール氏のご厚意により、滞日中の日程にわれわれの研究室での講義を組み込んでいただき、同氏の大変興味深い生い立ちから文学観・言語観にいたるまで、じっくりとお話を聞くことができた（講演は英語）。イスラエルの作家ということでは、われわれスラヴ科にあまり関係がなさそうだが（そのせいか、出席者も非常に少なく、準備側は青くなった）、スラヴ科は西洋近代語近代文学科も合わせて持つ研究室であり、近・現代ユダヤ文学も当然、視野に入れておかねばならない。またアッペルフェルド氏はパウル・ツェランと同じく、ブコヴィナのチェルノフツィの生まれであり、幼い頃からドイツ語・イディッシュ語の他に、ルーマニア語、ウクライナ語、ロシア語などに接する「多言語的環境」に育ってきた作家なので、スラヴを専攻する者にもじつは縁が色々あり、同氏のお話はとても興味深いものだった（ちなみに、同氏は生前のウラジーミル・ナボコフともつきあいがあったという）。